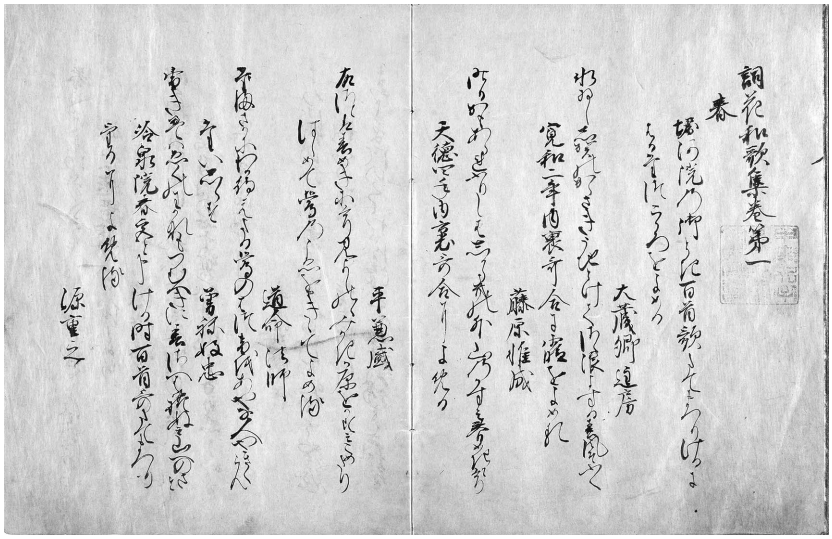
甲南女子大学図書館蔵『詞花和歌集』紹介と翻刻（上）

米田明美

はじめに

甲南女子大学図書館には、室町時代中期から後期頃に書写された『詞花和歌集』（以下『詞花集』と略す）を所蔵している。『詞花集』の伝本は数多く、その中でも最も古いのは、鎌倉前期書写の伝為氏本（天理図書館蔵　重要文化財）（注１）である。本学所蔵本はその伝為氏本や新大系本（底本　国立歴史民俗博物館伝為忠筆本―旧高松宮家蔵　南北朝書写）（注２）と歌順や歌数が異なっており、これまでその内容等について、詳細な研究分析が行われてこなかったので、ここに翻刻とともに紹介したい。



（注1）井上宗雄『詞花和歌集』解題（天理善本叢書69）一九八四年
（注2）新日本古典文学大系9『金葉和歌集　詞花和歌集』川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注　一九八九年（四版　二〇〇二年）岩波書店
尚『詞花和歌集』の解題は、工藤重矩が担当

本歌集は、縦一六・五糎、横一二・七糎の列帖装で、墨付き七〇丁の一冊。八～一〇行書き。和歌は一行書きで、歌数総数四一一首。料紙は鳥の子である。表紙には、茶色地に金銀泥で草花を描き、裏表紙は萩と鹿を描く。外題は龍形文様の題簽で、左上に「詞華和歌集」と墨書き。見返しは表裏とも菊花紋金箔型押出しで、現在も金の色は鮮やかである。奥書の記載はない。

極札は付されていないが、本歌集の説明を記した書付け一葉（明治廿七年六月六日の日付と「貞心」という署名）を有し、左端に彦根井伊家に伝来したとする記述がある。桐箱入り。

歌数が少なく、他の八代集に比べそれ程評価が高くない『詞花集』をこれだけ美装に仕立てているのは、同じ表装で仕立てられた他の勅撰集（八代集）があり、揃い本中の一冊であった可能性があるが、残念ながら今のところ他の本は見出せていない。

本稿の内容であるが、

一、『詞花集』成立過程
二、本学所蔵『詞花集』の特徴
三、翻刻　巻一～七まで　以上本稿（上）
四、翻刻　巻八～一〇
五、新大系本との異同表
六、書付け一葉の翻刻　以下（下）に掲載予定

一、『詞花集』成立過程

『詞花集』成立に関する撰進撰下及び撰集過程に関しては、撰者藤原顕輔の子清輔による『袋草紙』（保元二年～平治元年の頃成立）に詳しい。それによると、撰集は天養元（一一四四）年崇徳院が院宣を下し、撰者は左京大夫藤原顕輔。撰集作業がいつ終了したかは不明だが、奏覧後院の御製三首を含む六首の削除を指示され、また清輔の進言により古歌が何首か省かれたと記す。再奏覧は関白前太政大臣（忠通）の官職表記などから、七年後の仁平元（一一五一）年頃と推定されている。

以上から『詞花集』伝本は、初奏時に崇徳院が和歌削除を指示した六首を含むか否かで、大きく二系統に分けられる。奏覧前の六首を含む本を初度本、含まない本を二度本（精撰本）とし、最終的な歌数は四〇九首と考えられている。本歌集は院削除歌の六首がないことから、二度本に属すると考えられるが、その中でも更にどの形態に属するか考究していきたい。

二、本学所蔵『詞花集』の特徴

本歌集と新大系本との相違を和歌の出入りだけで比較すると、以下の通りとなる。歌番号は新大系本に拠る。

①巻一の歌順の相違
6以下、6・9・7・12・13・10・14の順（8・11歌なし）

②新大系本にない歌（二首）の存在
・163と164の間に
京極前太政大臣家にて歌合し侍けるに　大蔵卿匡房
君か代はくもりのあらしみかさ山峯のあたりのさゝむかきりは
・167と168の間に
天喜四年四月晦日后宮歌合によませ給ける　後冷泉院御製
なかはまのまさこのかすも何ならしつきせすもゆる君かみよかな

③新大系本にはあるが、本歌集にはない歌（六首）の存在
8・11・199・239・379・403歌は、詞書・詠者名・歌ともになし

新大系本と比べると、本歌集は③の8・11・199・239・379・403歌がない。新大系本の底本は初度本に分類され、これら六首は初奏時に院によって削除された歌なので、本歌集が二度本とする所以である。

その二度本に関しても、いくつか分類ができ、井上氏の論をまとめられた工藤氏（注3）によると、

Ⅱ二度本系統（被除歌六首を持たない本）
（一）『金葉集』二度本との重複二首を有し、巻一の歌順が「9・7・12・13・10」または「9．7・12・10・13」であるもの
（二）巻一の歌順は番号順であるもの
（ア）『金葉集』二度本との重複歌を有するもの
（イ）『金葉集』二度本との重複歌を持たないもの

とする。①に関しては、（一）と合致する。次に②の163と164歌の間にある匡房詠「君が代は～」と167と168の間にある後冷泉院詠「なかはまの～」であるが、実はこの二首は『金葉集』二度本に存する重複歌（『金葉集』325・331）である。『袋草紙』によると、『金葉集』二度本にある歌は、『詞花集』では採らないことになっていたとされている。井上氏によると「推測すると、『金葉集』二度本にあることを気づかず入集し、最終段階で気づいて削ったのではなかろうか。」とされ、最終形態は四〇九首であろうとする。

以上、井上氏工藤氏の論に導かれて本歌集を鑑みると、甲南女子大学図書館蔵『詞花和歌集』本は、二度本（精撰本）の（一）に属し、最終完成形態への移行期の伝本と言えよう。尚新大系本との詳細な異同表については、別稿（下）にまとめて掲載する予定である。

（注3）工藤重矩校注　解題『詞花和歌集』（岩波文庫）二〇二〇年　岩波書店

三、翻刻

凡例

一、底本は、甲南女子大学図書館所蔵本を用いた。今回は紙面の都合上、巻一「春」部から巻七「恋上」部までの翻刻を記す。巻八「恋下」から巻一〇「雑下」の翻刻は、以下次号（下）に記す。

二、本文の翻刻は、漢字はすべて通行の字体を用い、仮名遣いも底本のままとした。墨付き本文の丁数も記している。

三、本文の歌番号は新大系本に拠ったが、それに存しない和歌には☆印を付した。

（墨付き）一ウ

詞花和歌集巻第一

春

堀河院の御うた百首歌たてまつりけるに
はるたつこゝろをよめる　　大蔵卿匡房

1氷ゐししかのからさきうちとけてさゝ浪よする春風そふく

寛和二年内裏歌合に霞をよめる　　藤原惟成

2昨日かもあられふりしはしからきの外山のかすみ春めきにけり

天徳四年内裏歌合によめる　　平兼盛

二オ

3古さとは春めきにけりみよしのゝみかきか原をかすみこめたり

はしめて鶯のこゑをきゝてよめる　　道命法師

4たまさかにわか待えたる鶯のはつねをあやな人やきくらん

たいしらす

5雪きえはゑくのわかなもつむへきに春さへはれぬみ山へのさと　曾祢好忠

冷泉院春宮と申しける時百首歌たてまつり

たるによめる　源重之

二ウ

6春日野にあさなくきしの羽をとは雪のきえまにわかなつめとや

《新大系本にある8歌なし》

梅花遠薫といふことをよめる

9吹くれは香をなつかしみ梅花ちらさぬほとの春風もかな　源時綱

鷹司殿の七十賀の屏風に子日したるかたか

きたる所に　赤染衛門

7よろつ代のためしに君かひかるれはねの日の松もうらやみやせん

《新大系本にある11歌なし》

題しらす　俊恵法師

12まこも草つのくみわたる沢辺にはつなかぬ駒もはなれさりけり

三オ

13もえいつる草葉のみかはをかさ原こまのけしきも春めきにけり　僧都覚雅

梅の花をよめる

10梅花にほひをみちのしるへにてあるしもしらぬ宿にきにけり　右兵衛督公行

天徳四年内裏歌合に柳をよめる

14さほ姫のいとそめかくるあをやきをふきなみたりそ春の山かせ　平兼盛

贈左大臣家歌合によめる

三ウ

15いかなれはこほりはとくる春風にむすほゝるらん青柳のいと　源季遠

故郷柳をよめる

16古さとのみかきの柳はる〳〵とたか染かけし朝みとりそも　源道済

題しらす

17深山木のその木すゑともみえさりし桜は花にあらはれにけり　源頼政

京極前太政大臣家に歌合し侍けるによ

める　康資王母

18紅のうす花さくらにほはすはみなしら雲とみてやすきまし

この歌を判者大納言経信紅のさくらは詩に

四オ

つくれとも歌によみたることなしと申しけれはあし

たにかの康資王母のもとへいひつかはしける　京極前太政大臣

19しら雲はたちへたつれとくれなゐのうす花さくら心にそゝむ　康資王母

返し

20白雲はさもたゝはたて紅のいま一しほを君しそむれは

おなし歌合によめる　一宮紀伊

21朝またき霞なこめそ山さくらたつねゆくまのよそめにもみん

四ウ

22しら雲とみゆるにしるしみよし野の吉のゝ山の花さかりかも　大蔵卿匡房

承暦二年内裏後番歌合によめる

23山さくらおしむにとまる物ならは花は春ともかきらさらまし
　遠山桜といふことをよめる　　大納言公實

24九重にたつしら雲とみえつるはおほうち山のさくら成けり
　題しらす　　前斎院出雲

25春ことに心をそらになす物は雲ゐにみゆるさくらなりけり
　白河に花みにまかりてよめる　　戒秀法師

五オ

26しら河の春の木すゑを見わたせは松こそ花の絶まなりけれ
　所〳〵の花をたつぬといふことをよませ給ける　　源俊頼朝臣

27春くれは花の木すゑにさそはれていたらぬさとのなかりける哉
　橘俊綱朝臣のふしみの山庄にて水辺桜花
　といふ事をよめる　　白河院御製

28池水のみきはならすは桜花かけをも浪におられましやは
　一条院の御ときならの八重さくらを人のたて　　源師賢朝臣

五ウ

　まつりて侍けるをそのおり御前に侍けれは
　その花をたまひて歌よめとおほせ
　られけれはよめる　　伊勢大輔

29いにしへのならの都の八重桜けふこゝのへに匂ひぬる哉
　新院のおほせにて百首歌たてまつりける
　によめる　　右近中将教長

30ふるさとにとふ人あらは山さくらちりなむ後をまてとこたへよ
　人〳〵あまたくして桜の花を手ことにおりて
　かへるとてよめる　　源登平

六オ

31桜花手ことにおりてかへるをは春のゆくとや人はみるらむ
　たいしらす　　道命法師

32春ことにみる花なれとことしよりさきはしめたる心ちこそすれ
　帰雁をよめる　　贈左大臣母

33ふるさとの花のにほひやまさるらんしつ心なく帰るかりかな　　源忠季

34中〳〵にちるをみしとや思ふらんはなのさかりにかへるかりかね
　桜のはなのちるをみてよめる　　藤原元真

六ウ

35さくら花ちらさて千代もみてしかなあかぬ心はさても有やと
　天徳四年内裏歌合によめる　　大中臣能宣朝臣

36桜花風にしちらぬ物ならは思ふことなき春にそあらまし
　太皇太后宮のかものいつきときこえたまひける
　時人〳〵まいりてまりつかうまつりけるに硯の
　箱のふたに雪を入ていたされてはへりけるしき
　かみにかきつけはへりける　　摂津

37さくら花ちりしく庭をはらはねはきえせぬ雪と成にけるかな

七オ

　すみあらしたる家の庭にさくらのひまなく

ちりつもりて侍けるをみてよめる

38はくひともなき古さとの庭のおもは花ちりてこそみるへかりけれ　源俊頼朝臣

橘俊綱朝臣伏見の山庄にて水辺落花

といふことをよめる

39桜さくこのした水はあさけれとちりしく花の渕とこそなれ　源師賢朝臣

藤原兼房朝臣家にて老人惜花といふこ

とをよめる

七ウ

40ちる花もあはれとみすやいそのかみふりはつるまて惜こゝろを　藤原範永朝臣

庭のさくらのちるを御覧してよませ給ける

41わかやとの桜なれともちるをりは心にえこそまかせさりけれ　花山院御製

さくらはなのちるをみてよめる

42身にかへておしむにとまる花ならはけふやは我世のかきりならまし　源俊頼朝臣

落花満庭といふ事をよめる

43庭もせにつもれる雪とみえなからかほるそ花のしるしなりける　花園左大臣

八オ

題しらす

44ちる花にせきとめらるゝ山河のふかくも春の成にけるかな　大中臣能宣朝臣

寛和二年内裏歌合によめる

45一枝にあかぬにほひをいとゝしく八重かさなれる山吹の花　藤原長能

麗景殿女御家歌合によめる

よみ人しらす

46八重さけるかひこそなけれ山吹のちらはひとへもあらしと思へは

堀河院御歌百首歌たてまつりけるに

よめる　太皇太后宮肥後

八ウ

47こぬ人をまちかね山のよふこ鳥おなし心にあはれとそきく

新院位におはしましし時牡丹をよませ給

けるによみ侍ける　関白前太政大臣

48さきしよりちりはつるまてみし程に花のもとにてはつかへにけり

老人惜春といふ事をよめる　橘俊成

49おいてこそ春のおしさはまさりけれいまいくたひもあはしと思へは

三月尽の日うへのをのこともを御前に

めして春のくれぬる心をよませ給けるに

九オ

よませたまひける　新院御製

50おしむとてこよひかきをくことの葉やあやなく春のかたみなるへき

（五行分空白）

九ウ

詞花和歌集巻第二

夏

卯月一日よめる　増基法師

51けふよりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらん

たいしらす　俊頼朝臣

52雪の色をぬすみてさける卯花はさえてや人にうたかはるらん

斎院の長官にて侍けるか少将になりて

賀茂祭の使してはへりけるをめつらし
きよしを人のいはせて侍ければよめる
一〇オ
53としをへてかけしあふひはかはらねとけふのかさしのめつらしき哉　大蔵卿長房
神祭をよめる
54さかきとる夏の山ちや遠からん夕かけてのみまつる神かな　源兼昌
郭公をまちてよめる
55昔にもあらぬ我身にほとゝきすまつ心こそかはらさりけれ　周防内侍
関白前太政大臣の家にて郭公の歌をの〳〵
十首つゝよませはへりけるによめる
一〇ウ
56ほとゝきすなくねならては世の中にまつこともなき我身なりけり　藤原忠兼
たいしらす
57ことしたにまつはつこゑを時鳥よにはふるさて我にきかせよ　花山院御製
山寺にこもりて侍けるに時鳥のなき侍らさり
けれはよめる
58山さとのかひこそなけれほとゝきす都の人もかくや待らん　道命法師
題しらす
59やまひこのこたふる山の郭公ひとこゑなけは二こゑそきく　能因法師
60郭公あかつきかけてなくこゑをまたぬねさめの人やきくらん　藤原伊家
一一オ
61まつひとはぬる夜もなきを時鳥なく音は夢の心ちこそすれ　大納言公教
閑中郭公といふ事をよめる
62なきつとも誰にかいはむほとゝきすかけよりほかに人しなけれは　源俊頼朝臣
たいしらす
63こやの池におふるあやめのなかきねは引しら糸の心ちこそすれ　待賢門院堀河
土御門右大臣の家に歌合し侍けるに
よめる
64夜もすからたゝく水鶏は天の戸をあけて後こそ音せさりけれ　源頼家朝臣
一一ウ
題しらす
65五月雨の日をふるまゝにすゝか河やそせの浪そ音まさるなる　皇嘉門院治部卿
堀河院御とき百首歌たてまつりけるに
よめる
66わきもこかこやのしのやの五月雨にいかてほすらん夏引の糸　大蔵卿匡房
右大臣家の歌合によめる
67さみたれに難波ほり江のみをつくしみえぬや水のまさるなるらん　源忠季
郁芳門院の昌蒲根合によめる
一二オ
68もしほやくすまのあま人うちたえていとひやすらむ五月雨のそら　中納言通俊
藤原通宗朝臣歌合し侍けるによめる
69さ月やみ花たちはなに吹風はたかさとまてかにほひゆくらん　良暹法師
よをそむかせ給て後はな橘を御覧して
よませ給ける
70やとちかく花たちはなはほりうへし昔をしのふつまと成けり　花山院御製
なてしこのはなをみてよめる

71うすくこくかきほにほふなてしこの花の色にぞ露もをきける　藤原経衡
一二ウ
贈左大臣の家に歌合し侍けるによめる
72たねまきしわかなてしこの花さかりいくあさ露のをきてみつらん　修理大夫顕季
寛和二年内裏歌合によめる
73なくこゑもきこえぬものゝかなしきはしのひにもゆるほたる成けり　大弐高遠
六条右大臣の家に歌合し侍けるによめる
74さ月やみう河にともすかゝり火のかすます物はほたるなりけり　よみ人しらす
水辺納涼といふ事をよめる
一三オ
75風ふけは河辺すゝしくよる浪のたちかへるへき心ちこそせね　藤原家経朝臣
題しらす
76そま河のいかたの床のうき枕夏はすゝしきふしと成けり　曾祢好忠
長保五年入道前太政大臣の家に歌合し
侍けるによめる
77まつほとに夏の夜いたくふけぬれはおしみもあへす山のはの月　源道済
たいしらす
78河上に夕立すらしみくすせくやなせのさなみ立さはく也　曾祢好忠
閏六月七日よめる
一三ウ
79つねよりもなけきやすらむ七夕はあはまし暮をよそになかめて　太皇太后宮大弐
題しらす
80下紅葉ひとはつゝちる木のしたに秋とおほゆるせみのこゑかな　相模
81むしのねはまたうちとけぬ草むらに秋をかねてもむすふつゆかな　曾祢好忠
（五行分空白）
一四オ
詞花和歌集巻第三
秋
たいしらす
82山しろのとはたのおもをみわたせはほのかに今朝そ秋風はふく　曾祢好忠
摂津国にすみ侍ける比大江為基任はて、
のほりはへりたれはいひつかはしける
83きみすまはとはまし物をつのくにのいく田のもりの秋のはつかせ　僧都清胤
七月七日式部大輔資業かもとにてよめる
一四ウ
84荻の葉にすかく糸をもさゝかには七夕にとやけさはひくらん　橘元任
御くしおろさせ給ての後七月七日よませ給
ける
85たなはたにころももぬきてかすへきにゆゝしとやみんすみそめのそて　花山院御製
承暦二年内裏歌合によめる
86七夕に心はかすとおもはねとくれゆく空はうれしかりけり　藤原顕綱朝臣
たいしらす
87いかなれはとたえそめけん天のかはあふせにわたすかさゝきのはし　加賀左衛門
新院仰にて百首歌たてまつりけるによめる
一五オ
88あまの河よこきる雲や七夕の空たき物のけふりなるらん　左京大夫顕輔

寛和二年内裏歌合によめる

89おほつかなかはりやしにしあまの河としに一たひわたるせなれは　大中臣能宣朝臣

七夕によめる

90天河たまはしいそきわたさなんあさせたとれはよのふけゆくに　修理大夫顕季

橘俊綱朝臣のふしみの山庄にて七夕後朝

の心をよめる

91あふ夜とはたれかはしらぬたなはたのあくる空をもつゝまさらなん　良暹法師

一五ウ

92七夕のまちつるほとのくるしさとあかぬわかれといつれまされり　藤原顕綱朝臣

題しらす

93あまのかはかはらぬ水を七夕はうらやましとや今朝はみるらん　祝部成仲

三条太政大臣の家にて八月十五夜に水上

月といふ事をよめる

94水きよみやとれる月の影さへや千代まて君とすまむとすらん　源順

たいしらす

95いかなれはおなし空なる月影の秋しもことにてりまさるらん　右大臣

家にて歌合し侍けるに

一六オ

96春夏は空やはかはる秋の夜の月しもいかてりまさるらん　左衛門督家成

月を御覧してよませ給ける

97秋に又あはむあはしもしらぬ身は今夜はかりの月をたにみん　三条院御製

題しらす

98ありしにもあらす成ゆくよの中にかはらぬ物は秋のよの月　天台座主明快

関白前太政大臣の家にてよめる

99秋の夜の月の光のもる山はこのしたかけもさやけかりけり　藤原重基

一六ウ

ひえの山の念仏にのほりて月をみてよ

める

100あまつ風雲ふきはらふたかねにてみつる秋のよの月　良暹法師

京極前太政大臣の家歌合によめる

101秋のよの月にこゝろそひまもなき出るをまつと入を惜と　藤原顕綱朝臣

関白前太政大臣の家にて八月十五夜の心を

よめる

102ひくこまにかけをならへてあふさかの関地よりこそ月はいてけれ　藤原朝隆朝臣

さ衛門督家成か家にて歌合し侍けるに

一七オ

よめる

103秋の夜の露もくもらぬ月をみてをき所なき我心かな　隆縁法師

月を待こゝろをよめる

104あきの夜の月まちかねて思ひやる心いくたひ山をこゆらん　大江嘉言

月浮山水といふこゝろをよめる

105秋山のし水はくましにこりなはやとれる月のくもりもそする　藤原忠兼

寛和二年内裏歌合によませ給ける

一七ウ

106あきの夜の月にこゝろのあくかれて雲ゐに物を思ふ比かな　花山院御製

たいしらす

107ひとりゐてなかむるやとの荻のはに風こそわたれ秋の夕くれ　源道済

108荻の葉にそゝやあき風吹ぬなりこほれやしぬる露のしら玉　大江嘉言

109秋ふくはいかなる色のかせなれは身にしむはかりあはれなるらん　和泉式部

110みよし野のきさやまかけにたてる松いく秋かせにそなれきぬらん　曾祢好忠

一八オ

111おきの葉につゆふきむすふこからしの音そ夜さむに成まさるなる　藤原顕綱朝臣

霧をよめる

112夕霧に木すゑもみえすはつせ山いりあひのかねの音はかりして　源兼昌

法輪へまうてけるにさか野の花おもしろく

さきて侍けるをみてよめる

113秋の野の花みる程の心をは行とやいはんとまるとやいはん　赤染衛門

賀茂のいつきときこゑける時本院のすい

かきにあさかほの花さきかゝりて侍けるをよめる

一八ウ

114神かきにかゝるとならはあさかほも夕かくるまてにほはさらめや　禖子内親王

堀河院御時百首歌たてまつりけるによ

める　隆源法師

115ぬしやたれきる人なしに藤はかまみれは野ことにほころひにけり　周防内侍

白河院鳥羽殿にて前栽合をさせ給けるに

よめる

116あさな〳〵露おもけなる萩か枝に心をさへもかけてみる哉　敦輔王

117おきの葉にことゝふ人もなき物をくる秋ことにそよとこたふる　たいしらす

一九オ

118秋の野の草むらことにをく露はよるなく虫の涙なるへし　曾祢好忠

119八重むくらしけれるやとは夜もすから虫のねきくそとり所なる　永源法師

120なく虫のひとつこゑにもきこえぬはこゝろ〳〵に物やかなしき　和泉式部

みちの国の任はてゝのほり侍けるにをはりの

くになるみのにすゝむしの鳴けるをよめる

121古さとにかはらさりけりすゝ虫のなるみの野への夕暮のこゑ　橘為仲朝臣

天緑三年女四宮歌合によめる

一九ウ

122秋風につゆを涙となく虫のおもふ心をたれにとはまし　橘正通

駒迎をよめる

123あふさかの杉まの月のなかりせはいくきのこまといかてしらまし　大蔵卿匡房

永承五年一宮歌合によめる

124きく人のなとやすからぬ鹿の音はわかつまをこそ恋てなくらめ　出羽弁

たいしらす

125秋はきを草のまくらにむすふ夜はちかくも鹿のこゑをきくかな　藤原伊家

二〇オ

九月十三夜に月照菊花といふ事をよませ

給ける

126あきふかみ花には菊のせきなれはした葉に月ももりあかしけり　新院御製

関白前太政大臣家にてよめる

127霜かるゝはしめとみすはしら菊のうつろふ色をなけかさらまし　源雅光
　題しらす
128ことし又さくへき花のあらはこそうつろふきくにめかれをもせめ　道命法師
129草かれの冬までみよと露しものをきてのこせる白菊のはな　曾祢好忠
二〇ウ
　宇治前太政大臣白河にて見行客といふこと
　をよめる
130関こゆる人にとはゝやみちのくのあたちのまゆみ紅葉しにきや　堀河右大臣
　むさしの国よりのほり侍けるに三川のくに
　ふたむら山の紅葉をみてよめる
131いくらともみえぬ紅葉のにしきかなたれふたむらの山といふらん　橘能光
　寛治元年太皇太后宮・歌合によめる
132ゆふされはなにかいそかん紅葉はのしたてる山はよるもこへなん　大蔵卿匡房
二一オ
　たいしらす
133山さとはゆきゝのみちもみえぬまて秋のこの葉にうつもれにけり　曾祢好忠
　春より法輪にこもりて侍けるに秋おほ井河に
　もみちのひまなくなかれけるをみてよめる
134春雨のあやをりかけし水の面に秋は紅葉のにしきをそしく　道命法師
　雨後落葉といふことをよめる
135なこりなく時雨の空ははれぬれとまたふる物は木のはなりけり　源俊頼朝臣
　月のあかゝりけるに紅葉のちるをみてよめる
二一ウ
136あれはて、月もとまらぬ我やとに秋の木のはを風そ吹ける　平兼盛
　一条摂政の家のしやうしにあしろにもみちの
　ひまなくよりたるかたかけるところをよめる
137秋ふかみもみちをちしくあしろ木はひをのよるさへあかくみえけり　藤原惟成
　はつ霜をよめる
138はつ霜もをきにけらしな今朝みれは野へのあさちも色付にけり　大中臣能宣朝臣
　雨中九月尽といふことをよめる
二二オ
139いつかたへ秋のゆくらんわかやとにこよひはかりはあまやとりせて　前大納言公任
（五行分空白）
二二ウ
詞花和歌集巻第四
　冬
　題しらす
140何こともゆきていのらむと思ひしに神無月にも成にける哉　曾祢好忠
141ひさきをふる沢辺のちはら冬くれはひはりの床そあらはれにける　大弐資通
　家に歌合しはへりけるに落葉をよめる
142こすゑにてあかさりしかは紅葉ゝのちりしく庭をはらはてそみる　左衛門督家成
　たいしらす
143色ゝに染しくれにもみち葉はあらそひかねてちりはてにけり　大江嘉言
二三オ

144 山ふかみをちてつもれる紅葉ゝのかはけるうへにしくれふる也
落葉埋水といふことをよめる　惟宗隆頼

145 いまさらにをのかすみかをたゝしとて木のはのしたにをしそ鳴なる
落葉こゑありといふことをよめる

146 風ふけはならのうらはのそよ〳〵といひあはせつゝいつちちるらん
たいしらす　曾祢好忠

147 とやまなるしはのたち枝に吹風のおときくをりそ冬は物うき
二三ウ　よみ人しらす

148 秋はなをこのはかくれもくらかりき月は冬こそみるへかりけれ
東山に百寺をかみ侍けるにしくれのし
けれはよめる　左京大夫道雅

149 もろともに山めくりする時雨かなふるにかひなき身とはしらすや
旅宿時雨といふことをよめる　瞻西法師

150 いほりさすならの木かけにもる月のくもるとみれは時雨ふる也
天暦御時御屏風にあしろに紅葉おほく
よりたるかたかける所によめる　平兼盛

二四オ

151 みやまにはあらしやいたく吹ぬらんあしろもたはに紅葉つもれる
鷹狩をよめる　藤原長能

152 あられふるかた野のみの、かり衣ぬれぬやとかす人しなけれは
堀河院御とき百首歌たてまつりける中
によめる　大蔵卿匡房

153 山ふかみやくすみかまの煙こそやかて雪けの雲と成けれ
大和守にて侍ける時入道前太政大臣のもとに
てはつ雪をよめる　藤原義忠朝臣

154 年をへてよし野の山にみなれたるめにめつらしき今朝のはつ雪
二四ウ
たいしらす　大江嘉言

155 日くらしに山路のきのふ時雨しはふしのたかねの雪にそ有ける
大蔵卿匡房

156 おく山のいはかき紅葉ちりはてゝくち葉かうへに雪そつもれる
新院位にをはしましゝ時雪中眺望と
いふことをよませ給けるによみ侍ける　関白前太政大臣

157 くれなゐとみえしこすゑも雪ふれはしらゆふかくる神なひのもり
題しらす　和泉式部

158 まつ人のいまもきたらはいかゝせんふまゝくおしき庭の雪かな
二五オ
歳暮のこゝろをよめる　成尋法師

159 かすならぬ身にさへ年のつもるかな老は人をもきらはさりけり
曾祢好忠

160 たまゝつるとしのをはりに成にけりけふにや又もあはんとすらむ
（五行分空白）
二五ウ
詞花和歌集巻第五
賀
一条院上東門院に行幸せさせ給けるに
よめる　入道前太政大臣

161 君か代にあふくま河のそこきよみ千とせをへつゝすまむとそ思ふ
正月一日子うみたる人にむつきつかはすとて

よめる　伊勢大輔

162めつらしくけふたちそむるつるのこはちよのむつきをかさぬへきかな

一条左大臣家のしやうしに住吉のかたかき

たる所によめる　大中臣能宣朝臣

二六オ

163過きにし程をはすてつことしより千代をかそへん住吉の松

☆京極前太政大臣家にて歌合し侍けるに　☆大蔵卿匡房

☆君か代はくもりもあらしみかさ山峯のあたりのさゝむかきりは

長元八年うちの前太政大臣家歌合し侍ける

によめる　能因法師

164きみか世はしら雲かゝるつくはねのみねのつゝきのうみとなるまて

たいしらす　赤染衛門

165さか木葉をてにとりもちて祈くる神のよゝりも久しからなん

三条太政大臣の賀の屏風のゑに花みて帰

二六ウ

人かきたる所によめる　なかつかさ

166あかてのみかへると思へは桜花おるへき春そつきせさりける

或人子三人にかうふりせさせたりけるまた

の日いひつかはしける　清原もとすけ

167松しまのいそにむれゐるあしたつのをのかさま〳〵みえし千世かな

☆天喜四年四月晦日后宮歌合によませ給ける　☆後冷泉院御製

☆なかはまのまさこのかすも何ならしつきせすもゆる君かみよかな

二七オ

上東門院御屏風に十二月晦日のかたかき

たる所によめる　前大納言公任

168ひとゝせをくれぬとなにかをしむへきつきせぬ千世の春を待には

河原院に人ゝまかりて歌合し侍けるに

松臨池といふことをよめる　恵慶法師

169たれにとかいけの心を思ふらんそこにやとれる松の千とせを

後三条院すみよしまうてによめる　よみ人しらす

170君か代の久しかるへきためしにや神もうへけん住吉のまつ

二七ウ

俊綱にくしてすみよしにまうてゝよめる　大納言つねのふ

171すみよしのあらひとかみのひさしさに松もいくたひおひかはりけん

（五行分空白）

二八オ

詞花和歌集巻第六

別

参議廣業絶て後いよの国のかみにてくたり

けるにいひつかはしける　民部内侍

172都にておほつかなさをならはすは旅ねをいかに思ひやらまし

みちさたにわすられて後陸奥守にて

くたりけるにつかはしける　和泉式部

173もろともにたゝまし物をみちのくのころもの関をよそにきくかな

二八ウ

左京大夫顕輔加賀守にてくたり侍けるに

いひつかはしける

174よろこひをくはへにいそく旅なれは思へとえこそとゝめさりけれ　源俊頼朝臣
橘則光朝臣陸奥守にてくたりはへり
けるに餞し侍とてよめる

175とまりゐてまつへき身こそ老にけれあはれ別は人のためかは　藤原輔尹朝臣
物ましける女の斎宮のくたり侍けるに
ともにまかりけるにいひつかはしける

二九オ

176かへりこむほとをはしらすかなしきはよを長月のわかれ成けり　藤原道経
大納言経信大宰帥にてくたり侍けるに
かはしりにまかりあひてよめる

177むとせにそ君はきまさん住吉のまつへき身こそいたく老ぬれ　津守国基
つねに侍ける女房の日向の国へくたりける
に餞給とてよみ給ける

178あかねさすひにむかひても思ひ出よ都はゝれぬなかめすらんと　一条院皇后宮
二九ウ
弟子に侍けるわらはのをやにくして人の国へ
まかりけるにさうそくつかはすとてよめる

179わかれちの草葉をわけんたひ衣たつよりかねてぬるゝそてかな　法橋有禅
月ころ人のもとにやとりて侍けるかかへり
ける日あるしにあひてよめる

180又こんとたれにもえこそいひをかね心にかなふいのちならねは　玄範法師
もろこしへわたり侍けるを人のいさめ侍り
けれはよめる

三〇オ

181とゝまらむとゝまらしともおほゝえすいつくもつゐのすみかならねは　寂照法師
人のもとにひころはへりて帰日あるし
にあひていひ侍ける

182ふたつなき心を君にとゝめをきてわれさへ我にわかれぬるかな　僧都清胤
大納言経信大宰帥にてくたりはへりけるに
俊頼朝臣まかりけれはいひつかはしける

183くれはまつそなたをのみそなかむへきいてん日ことに思ひおこせよ　太皇太后宮甲斐
橘為仲朝臣陸奥守になりてくたりける

三〇ウ

184あつまちのはるけき道を行めくりいつかとくへき下ひもの関　権僧正永縁
に太皇太后宮の大盤所よりとてたれとはなくて
修理大夫あきすゑ大宰大弐にてくたらむと
しはへりけるにむまにくしていひつかはしける

185たちわかれはるかにいきの松なれは恋しかるへき千世の影かな　く、つなひき
あつまへまかりける人のやとりて侍けるかあ
かつきにたちけるによめる

186はかなくも今朝のわかれのおしきかないつかは人をなからへてみし

三一オ（この丁空白）

三一ウ

詞花和歌集巻第七

恋上

恋の歌とてよみ侍ける　関白前太政大臣

187あやしくも我み山木のもゆるかな思ひは人につけてし物を

たいしらす　藤原実方朝臣

188いかてかはおもひありとはしらすへきむろのやしろの煙ならては

189かくとたにいはてはかなく恋しなはやかてしられぬ身とやなりなん

堀河院の御時百首歌たてまつりけるに　隆恵法師

三二オ

よめる　大蔵卿匡房

190おもひかねけふたてそむるにしき木の千つかもまたてあふよしもかな

題しらす　平兼盛

191谷河のいはまを分てゆく水のおとにのみやはきかむと思ひし

春たちける日承香殿女御のもとへつかはしける　一条院御製

192よとゝもに恋つゝすくる年月はかはれとかはる心ちこそせね

承暦四年内裏歌合によめる　藤原伊家

193わか恋は夢路にのみそなくさむるつれなき人もあふとみゆれは

三二ウ

新院位にをはしましし時うへのをのことも

を御前にめしてねさめの恋といふこゝろを

よませたまひけるによめる　佐兵衛督公能

194なくさむる方もなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせは

寛和二年内裏歌合によめる　藤原惟成

195命あらはあふ夜もあらむ世の中になとしぬはかり思ふ心そ

左京大夫あきすけか家に歌合し侍け

るによめる　大納言成通

三三オ

196よそなからあはれといはむことよりも人つてならていとへとそおもふ

たいしらす　寛念法師

197恋しなは君はあはれといはすとも中ゝよその人やしのはん

つれなき女につかはしける　賀茂成助

198いかはかり人のつらさをうらみましうき身のとかと思ひなさすは

《新大系本にある199歌なし》

題しらす　浄蔵法師

200わかためにつらき人をはをきなから何のつみなき世をやうらみん

女をあひかたらひけるころよしありてつの

国のなからといふ所にまかりてかの女のもと

三三ウ

へいひつかはしける　平兼盛

201わするやとなからへゆけと身にそひて恋しきことはをくれさりけり

たいしらす　よみ人しらす

202年をへてもゆてふしの山よりもあはれ思ひはわすれそまされる

203わひぬれはしゐて忘れんと思へとも心よはくもをつる涙か

204おもはしと思へはいとゝ恋しきはいつれかわれか心なるらん

205心さへむすふの神やつくりなんとくるけしきもみえぬきみかな

あた〳〵しくもあるましかりける女をいとしの　能因法師

三四オ
ひていはせ侍りけるを世にちりてわつらはしきさま
にきこえけれはいひたえて後とし月をへて思ひ
あまりていひつかはしける
206ひとたひは思ひたえにし世の中をいかゝはすへきしつのおたまき　前大納言公任
三ゐ寺にはへりけるわらはを京にいてはかならす
つけよとちきり侍りけるをきやうへ出たりとは
きゝけれともをとつれもし侍らさりけれはいひつ
かはしける
207影みえぬ君はあまよの月なれや出ても人にしられさりけり　僧都覚雅
三四ウ
さらにゆるきなき女に七月七日につかはしける
208七夕に今朝ひくいとの露をもみたはむけしきをみてややみなん　大納言道綱
恋の歌とてよめる
209身のほとを思ひしりぬることのみやつれなき人のなさけなるらん　隆縁法師
左衛門督家成かつのくにの山庄にて旅
宿恋といふことをよめる
210わひつゝもおなし都はなくさめきたひねそ恋のかきり成ける
冷泉院春宮と申しける時百首歌たてまつり
三五オ
けるによめる　源重之
211かせをいたみ岩うつなみのををのれのみくたけて物を思ふ比哉
堀河院御時百首歌たてまつりけるによめる
212わか恋はよし野の山のおくなれや思ひいれともあふ人もなし　修理大夫顕季
題しらす　平祐挙
213むねはふしそては浦見か関なれや煙もなみもたゝぬ日そなき
214いたつらにちつかくちにしにしき木を猶こりすまに思ひたつかな　藤原永実
春になりてあはむとたのめたる女のさもある
三五ウ
ましけにみえけれはいひつかはしける
215山桜つゐにさくへき物ならは人の心をつくさゝらなん　道命法師
堀河院の御時蔵人にてはへりけるに贈皇
后宮の御方に侍りける女をしのひてかたら
ひ侍けるをこと人に物いふときゝてしら菊
の花にさしてつかはしける
216霜をかぬ人の心はうつろひておもかはりせぬしらきくのはな　源家時
返事女にかはりて
三六オ
217しら菊のかはらぬ色もたのまれすうつろはてやむ秋しなけれは　大納言公実
中納言俊忠家歌合によめる
218紅のこそめのころもうへにきむこひの涙の色かくるやと　藤原あきつなの朝臣
題しらす
219しのふれと涙そしるきくれなゐに物おもふ袖はそむへかりけり　源道済
ふみつかはしける女のいかなる事かありけん
いまさらに返事をせさりけれはいひつか
はしける
三六ウ　源雅光

220くれなゐに涙の色もなりにけりかはるは人の心のみかは
　左京大夫あきすけか家にて歌合し侍り
　けるによめる　平実重

221恋しなむ身こそ思へはおしからねうきもつらきも人のとかゝは
　たいしらす　道命法師

222つらさをは君にならひてしりぬるをうれしきことを誰にとはまし
　女をうらみてよめる　藤原道信朝臣

223うれしきはいかはかりかは思ふらんうきは身にしむ物にそ有ける
　ひえの山に歌合し侍りけるによめる
三七オ　心覚法師

224恋すれはうき身さへこそをしまるれおなし世にたにすまむとおもへは
　題しらす　大中臣能宣朝臣

225みかきもるゑしのたく火のよるはもえひるはきえつゝ物をこそ思へ
　よみ人しらす

226わか恋やふたみかはれる玉くしけいかにすれともあふかたそなき
　山てらにこもりてひころ侍て女のもとへいひつか
　はしける　藤原範永朝臣

227こほりして音はせねとも山河のしたはなかるゝ物としらすや
　関白前太政大臣家にてよめる
三七ウ　藤原親隆朝臣

228風ふけはもしほの煙かたよりになひくを人のこゝろともかな
　題しらす　新院御製

229瀬をはやみ岩にせかるゝたき河のわれても末にあはむとそおもふ
　曾祢好忠

230はりまなるしかまにそむるあなかちに人を恋しと思ふ比かな
　冬ころくれにあはむといひたる女にくらしかね
　ていひつかはしける　道命法師

231ほともなくくると思ひし冬の日のこゝろもとなきをりも有けり
三八オ
　家に歌合しはへりけるによめる　中納言俊忠

232恋わひてひとりふせやによもすからおつる涙やをとなしのたき
（五行分空白）

（以下次号）

Introduction of *the Shikawakashū* Owned by Konan Women's University Library and its Reprint (Vol.I)

YONEDA Akemi

Key Words: the Shikawakashū, Owned by Konan Women's University Library